公民館報
さかえ
第345号
令和４年３月１日発行

■ 発行
栄村公民館
〒389-2703
長野県下水内郡栄村
大字堺9214-1
■ 電話
0269-87-2100
■ 編集
栄村公民館報編集委員会

栄村の給食を考えようの会

菌ちゃん野菜作りにチャレンジ！

写真上：収穫した野菜
（保育園の給食におすそ分けしました）
写真下左：糸状菌　写真下右：収穫

代表　鑓水　愛

昨年2月「いただきます2～ここは発酵の楽園～」の上映会を行い、6月には公民館主催で、この映画に登場する菌ちゃん先生こと吉田俊道さんの講演会を開催。これをきっかけに、栄村公民館と共に菌ちゃん農法（土の中の良質な微生物【菌ちゃん】を増やし、ミネラル豊富な生命力あふれる野菜を作る農法）にチャレンジしました。

1回目は、齋藤春子さん（長瀬）からボカシの作り方を学び、2回目には、そのボカシと野菜クズ（調理の際に出る、野菜の皮や端）を混ぜて土を作りました。そして、土が熟成してきた頃に秋野菜の種を蒔き、11月には、驚くほど元気で、立派な小松菜や大根、にんじんが育ちました。土を触ってみると、フカフカで糸状菌がびっしり。この糸状菌が野菜の根っこにくっついて、土から生理活性物質【菌ちゃんパワー】を野菜に運んで元気にしてくれるそうです。虫食いもほとんどなく、小松菜が立派に育ったことには本当に驚きました。元気な野菜は虫が食べに来ないそうです。実は比較で、何も入れていない土にも種を蒔いてみたのですが、ほぼ何も育ちませんでした。

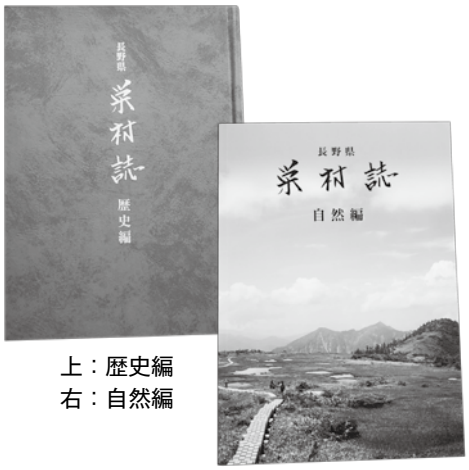
菌ちゃん畑で育った野菜は味が濃く、どれも甘さがあって驚きました。特に小松菜は甘みが強く、生で食べてもえぐみがまったくありませんでした。

野菜クズがこんなにも活躍してくれることを実感し、冬の間も野菜クズとボカシ、塩を混ぜて野菜クズたい肥作りに挑戦し続けています。発酵して漬物みたいな匂いになっていますが、春からまた菌ちゃん野菜を育てようと考えています。菌ちゃんパワーで夏の小松菜も虫に食べられないのか?!今からドキドキ楽しみです。

こちら せ通信

令和4年2月1日付けで刊行された栄村誌。平成29年に着手してから5年の歳月をかけて、私たちのルーツでもある歴史や、自然環境の豊かさを知ることのできるものが出来上がりました。

今回刊行された村誌は、自然編と歴史編に分かれており、自然編では、植物や動物の写真がたくさん掲載されているため、ちょっとした図鑑としても活用することができそうです。また、様々な自然環境や生物の生息状況から、栄村の自然の豊かさを感じていただけるのではないでしょうか。



上：歴史編
右：自然編

自然編より

歴史編では、区に残された古文書や村民のお宅で保管されていた古文書の資料も活用されています。また、この世に1冊しかないといわれている鈴木牧之の『秋山記行』草稿本や実際に調査をして作成した仙当城の縄張り図など、大変貴重な資料が掲載されています。近年発見されたひんご遺跡や雨引城についても掲載されていますので、雪も落ち着いたこの季節にぜひご覧ください。

もっと知りたい！直接執筆者から話を聞いてみたい！という方は、ぜひ公民館までお問合せください。講座開催に向けて準備を進めます。

村誌を手に 栄村の魅力 再発見

60年ぶりに栄村誌が刊行されたことを受けて、執筆者と共に学ぶ様々な講座を展開したいと準備を進めています。

栄村誌を活用して、栄村の魅力を再発見しましょう！

栄村誌刊行記念
「笹本正治監修基調講演会」

- **期日：４月23日㈯**
- **会場：栄村文化会館かたくりホール**

栄村誌刊行を記念して、村誌監修の笹本正治先生（長野県立歴史館特別館長）をお招きした講演会を開催します。

笹本正治先生は日本の歴史学者で、特に武田信玄をはじめとした戦国期を専門とされており、数々の書籍も出版されています。

ローカルな地域文化も大切にされている、情熱的な先生のお話をぜひ聞きに来てください。詳細は後日チラシにてお知らせします。

地域史料保全有志の会主催

第１回栄村の文化と自然報告会
栄村の文化と自然を再発見！
～知れば知るほど栄村はすごい！～

新型コロナウイルスにより、思うように活動できなかったため、今年は栄村の魅力を再発見する報告会を開催します。

- **期日：令和４年３月12日㈯　午後１時～**
- **会場：さかえ倶楽部スキー場２階研修室**
- **開場：12時30分**
- **共催：栄村教育委員会、栄村公民館**

■■■ プログラム ■■■

13:00～13:05　開会の挨拶／白水 智(地域史料保全有志の会)
13:05～13:10　来賓挨拶／宮川幹雄 村長
【特別講演】
13:15～13:55　佐々木長生　雪国と民具～会津民具と栄村
（元福島県立博物館学芸員）
【身近な遺跡と生物を知ろう】
14:00～14:20　ひんご遺跡から見た栄村
高橋健樹（武蔵村山郷土の会事務局長）
14:25～14:45　すごいぜ！栄村の自然　Part２ ～今、私たちにできること～
浦井泰二・広瀬明彦（栄村希少動植物調査員）
＊＊＊＊＊ 休　憩 ＊＊＊＊＊
15:05～15:25　"秋山熊"によるクマ剥ぎの実態と忌避剤の効果
柳澤賢一（長野県林業総合センター研究員）
【村誌が刊行されました！－その調査成果から】
15:30～15:50　新遺跡『雨引城跡』が語る中世の栄村
遠藤公洋（長野市立豊野中学校／栄村誌調査・執筆員）
15:55～16:15　栄村城における山境争論
高野宏峰（地域史料保全有志の会／栄村誌調査・執筆員）

参加を希望される方は栄村教育委員会事務局☎0269-87-3118までお申し込みください

一石を投じる

館報編集委員会の一コマ

2月の編集委員会で、栄村やこれからの公民館報について話した内容を紹介します。

関澤義人公民館長

最近、『田舎はいやらしい　地域活性化は本当に必要か？（花房尚作著）』という本を読みました。著者は冒頭で「国や県は過疎対策として多額の金を投資しているが、金をかけて地域を活性化することは本当に必要なのか。過疎地はそういったことを望んでいるのか。このまま朽ちていけばよいと思っている人も多いのではないか」という投げかけから始まり、「過疎地域の人は都会のような競争のある環境など求めていない。気軽に過ごし、気軽に生活を営みながら暮らしているのであって、役場や中央官庁に任せておけばよいと思って暮らしている。価値観の違う若者をうっとうしいと感じ、合理性や効率性は軽視され、感情に価値を置き、変化を嫌う世界。主体的に～するという発言はなく、他所の話や誰かの噂話が大好きであり、発展など求めていない」というようなことを述べています。そうじゃないだろ、という反発心を抱きながら読み進めていくのですが、最後には、あ～なるほどな、といった内容で締めくくっています。

本を読み終えたとき、行政がお金を投資し続けなければ活性化しない地域は果たして持続可能なのかという疑問を抱きました。

私は、村民が栄村の暮らしを楽しみ、子育て世代が不安にならない村になったらいいなと思います。子どもがいなければ、その先の未来を考えにくい。そういう村には人は来ないのではないかと考えるからです。

村民の多くは、自然の中で暮らしていきたいと願っていると思います。今の暮らしを続けていきたい。私もそう考えている一人ですが、ただそこにいるだけで変化を求めないというばかりでは、立ちゆかなくなるとも思います。同じ価値観の人だけで暮らすことが地域の持続につながるのか―。けれども、同じ価値観だからこそ祭りや集落行事が盛り上がるという良いところもあります。

発展はしなくてもいいけれど、集落が緩やかに持続してほしいと願う人も多い。それには、かなりの労力がないと持続していかないと思うのです。

そういう中で、いかに楽しく暮らしていけるか。勝ち負けではないですが、田舎は楽しく暮らしたもの勝ちだと思います。そうした暮らしを楽しんでいる人を、公民館報で発信していけたらいいなと思っています。編集委員の皆さんはいかがですか。

齋藤和代編集委員

私は、縄文時代から続く里山の暮らしの中で、村民が培ってきた知恵や技をつなげていきたいと考えています。様々な行事の簡素化、特に、ここ数年はコロナによってそれが加速しています。これまで行事を通して、郷土調理や地域の文化が継承されていましたが、そうした場も少なくなってきているのが現状です。暮らしの中での知恵や技は、山菜採りや畑、雪の知恵、郷土料理等、様々な枝葉に分かれ、栄村での生きていく力につながると思います。

こうした活動は、イベント事で終わりにするのではなく、年間を通して、様々な世代が集い、高齢の方から話を聞き合うような方法がいいのかなと考えています。培ってきた高齢者から直接話を聞くことで、高齢者はこれまでの暮らしに自信を持つことができるし、若者は地域をより深く知ることができる。こうした活動の中で、村民が元気になっていくような活動をしていきたいと考えています。

それが暮らしの中で日常的に行われ、そうした人の背中から、後

世へと継続的に継承されたらいいなと思います。また、そうした技や知恵を持っている人は、それを駆使して、見せつけながら楽しく暮らしてほしいと願っています。

阿部美代子編集委員

私も、郷土料理の伝承が大切だと思っています。あんぼ、山菜料理、味噌、こんにゃく、栃もち等、栄村にはたくさんの郷土料理があります。嫁いできたばかりの頃は、すべてのものが珍しく、何も作れませんでした。最近になっていろいろなものに挑戦し、去年は初めてご近所さんと味噌を作ったのですが、ただ作るだけでなく、いろいろな話しをしながら知恵も教わることができ、とても楽しかったです。こういった、都会では味わえない時間が大切だと思いましたし、この文化をなくさないで伝えていきたいと思います。

コロナ禍の時代、特に人とのつながりが大事だと思います。栄村は集落の中で顔を知らない者はいません。大人から子供まで、全員知っています。知っているからこそ悪いことはできませんが、それ以上に助け合いの精神がすばらしい。困っていることがあれば、すぐに助けに来てくれます。年々高齢者の割合が増えていますが、高齢の方や一人暮らしの方には、いつでもとんできてくれる人の存在が必要なのだと思います。ご近所さんとのつながりや支え合い・助け合いの精神も大切にしていきたいですね。

島田 遥編集委員

私は特にこういう村になったらいいなという思いはありませんが、地域のしきたりといった決められたことから外れないように、

畑や田んぼなど、自分のやりたいことをやって楽しく過ごしています。雪が大変だという方も多いですが、大変だとはあまり思っていません。人が増えればいいなともあまり思ってもいなくて、自分自身が暮らしやすい、生きやすいと思えればそれでいいのかなと考えています。

2月上旬に村誌が配布され、それを読んでいるのですが、知らないことばかり掲載されていて非常に面白い。その場所へ行ってみたいと思いますし、改めて気づかされることも多い。こうした、知られざる栄村の魅力を再発見できていることに楽しさを感じています。

齋藤美希編集委員

今年は特に大雪なので、冬の除雪は大変だなと感じています。除雪救助隊等の村特有の制度もありますが、高齢の女性であったり、Iターンしてきた方であったり、女性の一人暮らしというのは暮らしづらいのかなと。

村の理想像は特にないですが、栄村にしかない良さを自分自身で分かっていながら暮らしていきたいと考えています。古代中国の思想家である、老子の言葉で「足るを知る」という言葉があります。「何事に対しても満足するという意識を持つことで、精神的に豊かになり、幸せな気持ちで生きていける」という意味なのだそうですが、欲張らず、今の生活の中に満足を見出せるような、そんな村暮らしができたら幸せだなぁと感じています。

栄村公民館報では、これからも村民の暮らしに寄り添い、栄村の可能性や村の未来を問いながら、栄村の暮らしを楽しむ村民や、知恵や技術を駆使して暮らしている逞しい村民を積極的に掲載していきます。

村の雰囲気も、未来も、村民一人ひとりの考えや行動で作られています。せっかくの一度きりの人生なのですから、少しでも前向きに楽しく暮らせるように、一歩を踏み出してみませんか。

公民館報への意見や感想等ありましたら栄村公民館（☎87－2100）までお知らせください（FAX可）。

あーそんなことがあったんか　～ど先生の栄村昔語り～　其の四十九

『春の深雪』訂正編

地域史料保全有志の会
鈴木 努（通称：ど先生）
イラスト作成：佐藤洋平

年明けから大雪が続きますが、お変わりありませんか。さてこのたび『栄村誌』が刊行されました。歴史編には村内にある古文書がふんだんに使われ、なかなか濃い内容となっています。栄村にはこんなにも色々なエピソードが詰まった場所なんだ、ということがよくわかる本に仕上がっています。

ところで新しく出た「村誌」に、前回紹介した豪雪についての話題が取り上げられています。これを見ますと古文書が記すのはもっと大きな事件であり、前回の記事は大幅に訂正しなくてはならないことがわかりました。まったく筆者の不徳と致すところです。幸い村誌編纂室のご協力を得て基礎となる資料を確認することができました。

そこで今回はお詫びかたがたあらためて前回の古文書を読み直したいと思います。

まず古文書の読み違いをした所から反省をします。冒頭の「このたび御勘定様が閏二月上旬に越後国魚沼郡に御用筋で通行する順道なので志久見村の山抜け場所を御見分遊ばされると仰せ渡されました」の部分、筆者は全体を村人が代官所から指令されたことと読み、「御見分遊ばされる」は村人から代官所への謙譲表現と判じましたが、ここは「『このたび御勘定様が（中略）御見分遊ばされる』と（代官所から）仰せ渡されました」と読むべきでした。つまり代官所が志久見村の人々に指示したのは通路の見分ではなく、「御勘定様を山抜け場所へ案内しろ」ということでした。ここを間違えたので後の解読があらぬ方向に行ってしまいました。なお、前回紹介した島田家文書のものとほぼ同文の古文書が桑原家に伝わっています。一方は年紀を欠き、一方は差出・宛名を欠いており、助詞などにも異同があるので、両者の作成経緯や関係はよくわかりません。

この志久見村の山抜けは、文化六年（一八〇九）三月一八日に起きた大規模な山の崩壊で、雪坪の田畑と居屋敷が大きな被害を受けました。「村誌」によれば集落背後の高まち山が崩れ、山続きの田畑に土砂が流れ込み、また十六軒のうち上村の八軒を押し潰した、というものです。旧村史では文政六年の事件としつつ、この時に田一町五反・畑二町余が潰れ、人家五軒が五尺から七尺ずり下がったといいます。幸い予兆に応じて早めに避難したため怪我人などはありませんでした。

村では代官所に注進し役人の見分を受けます。代官所は今後の成行きが見通せない難場であり、追って沙汰するとし当面は避難した人の面倒を親類・組合で見るように、また怪我人などが出ないよう見廻ることを指示します。その後、村は代官所から二九両の手当て金を受け取り、経費や礼金を差し引いた額が雪坪十六軒に分与されました。『栄村誌』にはその後の復興の過程が紹介されています。

幕府の勘定所役人が見分に来た目的は何か。村側で復興のために御普請（公費の出る工事）か、または何らかの公的補助をを要求したのかもしれません。別件で出張してきた役人に見分を頼む事例は珍しくなく、また代官所から上位の勘定方に報告が上りますから、この時機をとらえて勘定所役人の見分が組まれたと見ることもできます。ただ時季が悪いのは致し方なく、折角の見分も遠見で済ますよう願い出ることになりました。

今回は古文書の読み取りが甘く、大きな事件との関連を見逃してしまいました。誤った解釈を御目にかけましたこと、申し訳なく存じます。反省し、精進に努めます。また、御協力いただいた村誌編纂室にはあらためて御礼申し上げます。

冬の雪坪集落（令和４年２月25日撮影）

栄村公民館 図書室だより

４月に発表される本屋大賞のノミネート作品が決まり、栄村公民館図書室でも作品を多く揃え皆さんの利用をお待ちしています。

本屋大賞は通常の文学賞のように主催が出版社で選考者が作家ではなく書店に勤める書店員の投票により受賞が決まるので最近では芥川賞などより売り上げを伸ばす賞になり注目される賞になっているようです。

発表は４/６です。ぜひ読み比べてお気に入りの一冊を探してみませんか。

テーマコーナー

図書室入ってすぐ左のテーマコーナーは現在『芥川賞・直木賞』です。過去の受賞作品がぱっと見ただけで分かるようになっています。

来室された際に手に取ってみて下さい。

図書室ご利用のお願い

現在図書室は①マスク着用のお願い②短時間の利用③他の利用者との距離を保つなどのお願いをしています。

新着図書の紹介

花束は毒（織守きょうや）／ヒトの壁（養老孟司）／新しい星（彩瀬まる）
会って、話すこと。自分のことはしゃべらない。相手のことも聞き出さない。
人生が変わるシンプルな会話術（田中泰延）
さよならジュード（SAKURA）／シングルマザー、その後（黒川祥子）
問題の女（平山亜佐子）／夜が明ける（西 加奈子）
特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来（南原 詠）
世界「失敗」製品図鑑「攻めた失敗」20例でわかる成功への近道（荒木博行）
闇祓（辻村深月）／黒牢城（米澤穂信）／星を掬う（町田そのこ）
スモールワールズ（一穂ミチ）／嗤う淑女 二人（中山七里）
老い蜂（櫛木理宇）／本日は、お日柄もよく（原田マハ）

図書ボランティア募集中！

栄村公民館図書室では土日の午前中、図書室を開けてくださるボランティアさんを募集しています。この春からやってみませんか。読書の習慣もできますよ。栄村在住の成人している方ならどなたでもできます。

１～２か月に１度の当番です。お問い合わせは栄村教育委員会事務局☎87-3118までお願いします。

★栄村図書室開館時間★

平　日　午前８時半～午後５時
土・日　午前９時～正午
※祝日は休館します

★栄村図書室休館日★

３月19日㈯～21日㈪　４月29日㈮～30日㈯
５月１日㈰、３日㈫～５日㈭
連休で休館日があります。ご不便をおかけします。

村民広場

関谷　蓮（れん）さん（17歳）月岡

僕は４月から飯山高校の３年になります。振り返ってみると高校入学の時から既に僕たちの生活の一部に新型コロナがありました。その影響から様々な行事の中止、縮少、部活動においては大会の中止など辛く悲しいことがあった２年間でした。しかし、僕が一番大切だと思う事は最初でも途中でもなく、『最後』だと思います。今年僕は最後の高校１年間です。笑顔で卒業できれば高校生活が良い思い出になると思います。

新型コロナにより思うように過ごせない日々が続いていますが、下を向いている暇はありません。前だけ向いて笑顔で卒業できるように頑張りたいです。

おおきくな～れ

将棋が大好き！
お医者さんになりたい！

大雅（だいが）くん（６歳）㊧

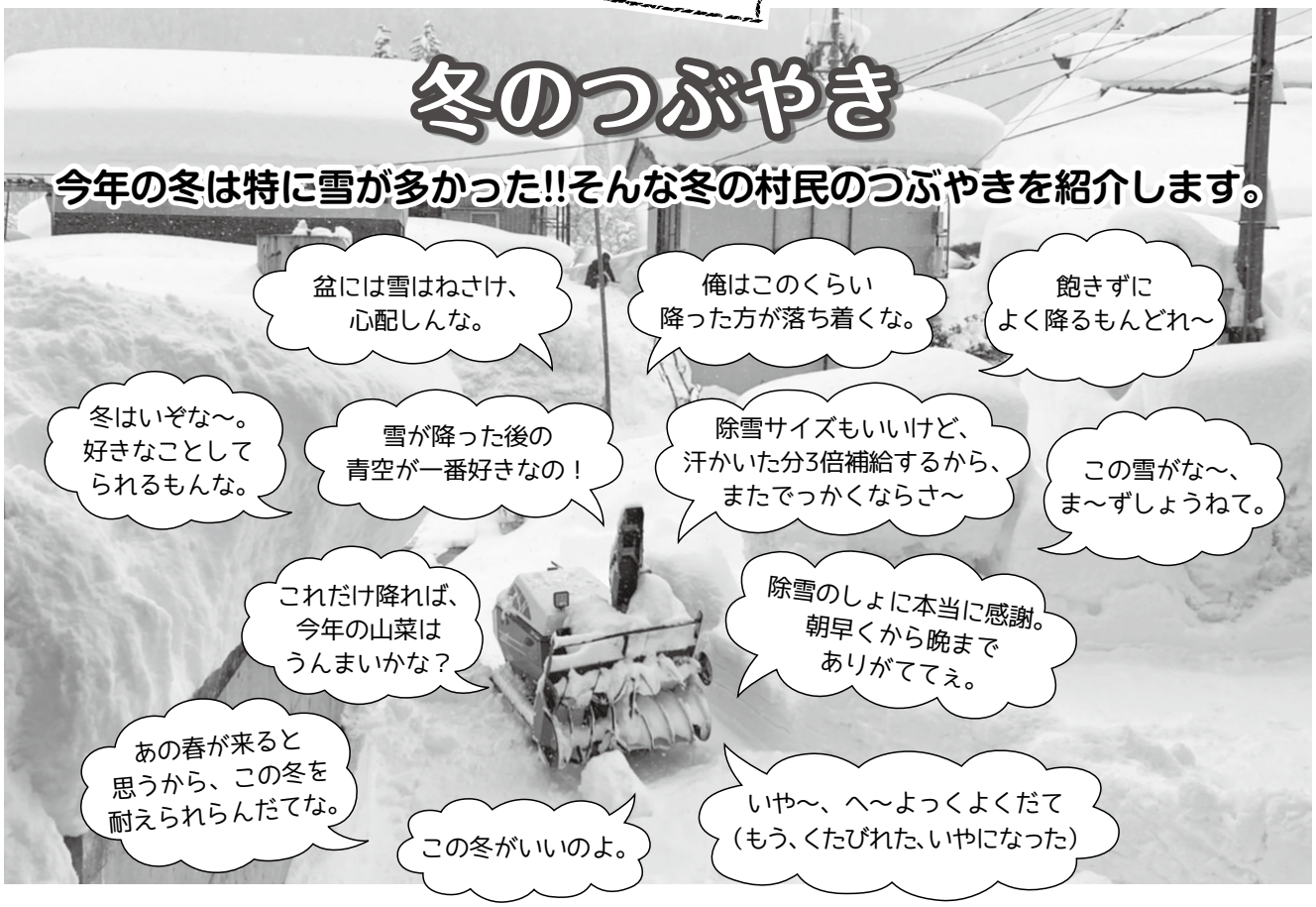
恐竜が大好き！
警察官になりたい！

虎白（こはく）くん（２歳）㊨

弟思いの優しい兄と、兄が大好きな弟です。兄弟仲良く大きくなってね！
山田健一さん・真優子さん宅(横倉)

冬のつぶやき

今年の冬は特に雪が多かった!!そんな冬の村民のつぶやきを紹介します。



越智の江戸日記

いつの間にかもう２年経ってしまいました。この２年間を総括すると、あらためて「多様であること」とどう向き合っていくか考えさせられた期間でした。東京で関わらせていただいた仕事は、初めは小さな拠点の形成推進、次は二地域居住の推進の仕事でした。小さな拠点の形成は、小さな地域をその地域のままなるべく残そうという目的の取り組みで、言い換えればこの日本の中で今残っている地域という多様性をなくさないようにする取り組みだと感じています。二地域居住に関してもコロナ禍によるテレワークの進展などで更に多様になった暮らしや働き方を支える考え方・生活の仕方の１つです。

また、前回で書いたように、東京の文化の多様さとその良し悪しも暮らしの中で感じましたし、それによって、栄村という一つの地域の中で深くなっていく多様さも感じることができました。

私達が今の社会で生きるにおいて、自身の中に多様さを持っていることは重要だと思っています。今は技術の進歩で世界中の人たちの様々な価値観に、誰でも何歳でも触れられるようになりました。そんな中ではたとえ昔から深いつながりを持っている栄村の中であっても、少し世代が違うだけで、お互いに「何言ってるかよくわからないなあ」と思うことが増えることもあると思います。そういう時にも、自分の中に多様さを持っておくことで、話し合うことができますし、お互いに理解をしあえるきっかけにもなるのではないでしょうか。

また、栄村の良いところは、昔から深くて強いコミュニティを持っていることで、価値観の違いも東京などより実感を持って感じることができると思います。それにより、自身の中の多様さが生まれやすくなりますし、その価値観の違いが自分の中で受け入れやすくもなるのでは、と思っています。誰ひとり取りこぼさない村を目指したいですね。

２年間本当にありがとうございました。

ほっこり話

今年はたくさんの雪が降りました。２月下旬になっても大雪警報が発令されたときには「もう勘弁してくれ」と思った方も多いはず。

そんな中、竹花組事務所の前には何ともかわいらしい雪像が！コロナによってさまざまなイベントが中止や延期になる中、雪国を楽しむ村民の心と、ユーモアあふれる雪像アートに、思わず微笑んでしまう、なんとも心温まる作品でした。

※一部を紹介します。
左：コアラ
下：軽トラと重機

今月の一句 ～栄村俳句会～

寺参道猫の足跡春の雪　斎藤はる子
春陽差す山々山に流る雲

久方の日差し確かに春の色　関谷貞子
鳥の声見上げる顔に春の雪

子どもらのつらら落として帰る道　馬場澤子
雪の日やトラ猫トラちゃんニャンと甘え

もかもかと雪降る朝の椀の湯気　柳静江
春間近日差しの中に大空に

障子ごし雪満月の白さかな　杉浦恵子
房の国水仙白く海蒼し

一月号に掲載した俳句に誤りがありました。お詫び申し上げます。
〈誤〉線虫やこの騒がしき世を知らず　関谷貞子
〈正〉**綿虫やこの騒がしき世を知らず　関谷貞子**

編集後記

近年にない大雪で、容赦のない自然の怖さを再認識させられた今年の冬でした。雪を知らない国の人にとっては想像を絶する世界です。人間の背丈をはるか超えて、雪が家にも畑にも区別なく降り積もるのですから。そういう所に、私たちは幸運にも住むことが出来ています。自給自足を基本にした、古き良き時代の暮らしへの憧れが日に日に膨らむ私ですが、大きな除雪機のあのたくましい姿は、どうしても頼ってしまい感謝しかないわけです。文明の利器でありがたい機器トップ10にスノーダンプとともにランクイン。　(よ)